

水稻「西南136号」の普通期栽培における現地適応性

表 普通期栽培における「西南136号」の特性 (2011～2013年)

試験場所	系統・品種名	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	精玄米 千粒重 (g)	精玄 米重 (kg/10a)	同左比 (%)	整粒 割合 (%)	白未熟 粒割合 (%)	検査 等級 (1-9)	タンパク 質含有率 (%)	アミロー ス含有率 (%)	現地 評価 (◎~×)
安芸市	西南136号	8/13	9/19	83	19.1	364	23.6	437	100	68.3	11.4	3.5	7.02	18.2	◎~○
	ヒノヒカリ	8/20	9/25	90	18.6	385	21.3	436	(100)	51.9	24.3	5.0	7.21	19.5	—
香美市	西南136号	8/13	9/20	71	21.0	284	23.5	535	102	66.2	14.4	3.7	6.82	19.5	○
	ヒノヒカリ	8/22	10/3	77	20.1	284	22.3	525	(100)	47.2	32.5	6.0	6.52	20.7	—
土佐町	西南136号	8/ 1	9/14	73	19.4	265	25.2	523	105	80.7	8.6	2.3	6.75	19.9	◎~○
	ヒノヒカリ	8/13	9/28	80	19.0	271	23.0	497	(100)	65.1	15.2	3.3	6.93	19.6	—
佐川町	西南136号	8/10	9/18	79	19.9	318	25.1	614	118	82.4	8.1	2.7	6.96	21.3	◎
	ヒノヒカリ	8/19	9/26	83	19.1	329	22.5	522	(100)	47.4	33.9	5.7	6.67	19.7	—
四万十町	西南136号	8/ 4	9/ 8	80	21.7	300	23.6	566	105	72.1	8.6	3.3	6.68	20.9	◎~○
	ヒノヒカリ	8/17	9/27	89	20.8	316	22.0	538	(100)	69.5	16.0	4.7	6.89	19.7	—
四万十市	西南136号	8/11	9/19	82	17.8	394	23.5	590	133	71.8	11.5	3.0	6.54	18.1	◎~○
	ヒノヒカリ	8/18	9/25	82	18.2	328	22.3	443	(100)	53.8	25.2	5.7	6.74	19.9	—

注) 6試験場所それぞれにおける3年平均値を示す。移植期は5月14日～6月15日、窒素施肥量は3.0～11.2kg/10a、栽植密度は11.1～22.2株/m²。精玄米千粒重および精玄米重は粒厚1.8mm以上の玄米を対象とし、水分15%換算値。整粒割合と白未熟粒割合、タンパク質、アミロース含有率は精玄米を対象として、それぞれ穀粒判別器(RGQ110A)、近赤外分析計(NIRFlex N-500)、オートアナライザーⅢで測定した値。検査等級は1～3が1等、4～6が2等、7～8が3等、9が規格外に相当する。現地評価は◎が有望、○がやや有望、△が再検討、×が打ち切りとして、各地域農業振興センター担当職員が評価。



写真「西南136号」(左)と「ヒノヒカリ」(右)の玄米(2013年産、四万十町)

水稻「西南136号」は鹿児島県農業開発総合センターで育成された有望系統で、農業技術センター内試験において、成熟期が「コシヒカリ」より7日程度遅く、「ヒノヒカリ」より10日程度早い「日本晴」熟期であること、粒が大きく高温下でも白未熟粒の発生が少ない良食味系統であることを確認しています(センターニュース第71号)。

高知県では夏期高温によって品質劣化の著しい「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」にかわる高温耐性品種の導入が求められています。特に、他県との競合が激しく、低収で、米価格の低い普通期栽培米の生産者からは、高温耐性に加えて、用途が広く、多収で、ブランド化や「ヒノヒカリ」との作業分散が可能な品種の選定が望まれています。そこで、今回は「西南136号」の普通期栽培地帯への適応性を評価するために実施した現地試験の結果を紹介します。

「西南136号」は「ヒノヒカリ」に比べて、出穂期は7～13日、成熟期は6～19日早く、稈長は短い傾向が見られ、収量は同程度以上(精玄米重比100～133%)でした(表)。全試験場所において、玄米千粒重が重く、整粒割合は高く、白未熟粒割合は低く、玄米外観品質が優れていました(写真)。また、玄米タンパク質、アミロース含有率は「ヒノヒカリ」と同程度であり、現地での総合評価はいずれの試験場所においても優れていました。

これらのことより「西南136号」は高温耐性に優れ、本県普通期栽培地帯での適応性が高いことが分かりました。

今後は消費者、実需者ニーズに対応できる系統(地域特産米、加工用米)としての利活用についても検討していきたいと考えています。

(水田作物担当 赤木浩介 088-863-4916)